



愛情への一つの道

及川ふみ

春まだ淡いころ、幼稚園の裏庭の椿、今年は例年より数多くの蕾をつけたとよろこんだのもつかの間、今日はその蕾が一つのこらずもぎ取られて、二人の女の子のエプロンのポケットの中一ぱいにつめこまれた。「これこんなに、かたい実、たくさんとって来ましたよ」と得意げなこどもの姿。

初夏の保育室に、乏しい材料費の中から、金魚鉢と、五匹の金魚をととのえて、こどもも、大人も楽しんだ。二三日子どもの帰ったあと、金魚は一匹もみえなくなった。ふしぎでならなかった。翌日お母さんの一人が、子どもが昨日幼稚園の金魚をポケットに入れて帰ってまいりました。かわりの金魚でございませうと、可愛い金魚鉢に金魚を五匹入れてもってこられて驚いた。

五月初旬、八十八夜の日に、組中のこどもたち一人一人が鉢植に、つるなしいんげんを蒔いた。もち主の名のついた経木のたて札も立て終って、友達の誰もが次の遊びにうつった。一人だけ自分の鉢の前にしゃがんでいつまでも鉢から眼をはなさない。どうしたことかとたずねると、「いんげん豆の芽の出るのをまっっているのだ」とい

った。

椿の蕾のこと、ポケットの金魚の事件、いんげん豆の芽、等子供たちと日常一緒に遊んでいる間には、これに類する大小の様々の出来事にそっくりすることがある。その度毎にいつも大人は、子どもの身辺近い環境に、自然の動植物を豊かに備えて、これ等に対しての、親しみと、愛撫の気持の育成の不足を強く感じさせられると共に、これ等に対しての程よき適當の指導が用意されなければならないと思われる。

ことに都会地域ではとくにこの点の配慮が多くむけられなくてはならない。

しかしこれには、経済的事情が直接に大きくつながる問題であることが一つと、今一つはその飼育栽培にあたる適当な人を得るという問題である。動植物の飼育栽培に対する十分な知識をもつことの上に、さらに多くの労力を必要とするのでこれにたえられて、これ等を育成する豊かな愛情の所有者であることなどの注文条件も多いので、実際問題としては種々の困難がともないがちである。しかしこのことは幼稚園の保育室の内外の環境として第一にとりあげられる重要な基本的なものであるべきはずのものである。

先日よき機会を得て、岡山大学附属幼稚園を参観することが出来た。日当りのよい、眺望の美しい場所で、保育室も、遊園も、幼児等に比して広々とした面積で、幼稚園の基準などよりは、はるかに広いものである。その保育内容の様子もしのばれる施設や、設備の工夫もなされていて、岡山県の保育界のサーピス・センターとして復活されたこの幼稚園の実況をみてたのもしくも、うれしく感じた。阪本教育学部長や、小松原園長、縦野教諭方の御熱意と御苦労も、うかがわれた。

とりわけ小松原園長は、次々と施設の抱負を語られるお話の中に規模の大きな禽舎を作って、多くの小鳥を飼育し附屬の中学校から、小学校、幼稚園までの各部に希望に応じて、かし出すことを計画している。飼育にあた

る人についても、責任者を一人定めておいて、餌のこと、休日中の世話などに手落ちのない様に考えていると語られた。小松原園長はさすがに理科専攻の御出身だとうなずけた。この計画が着々と進められて、その成果が後進の為によき指導を与えられることを願ってやまない。

当園でも、二十数年前ここ大塚の地に移転の際には、広い面積の学園の内に、子どもたちの自然の庭として、春には、すみれ、たんぽぽ、つくし、なづな、の花を思い、秋に、どんぐり、しいのみ、くりの実のおちる林も考えたが、なかなかその夢もさめて、ただ学内の園芸場へ、しばしば遊んで、四季折々の草花の美しく咲くのをみへちま、かぼちゃ、トマト、なす、きうりなどの野菜の生育を眺める程度のものである。

遊園の木々も年毎に、育てこんもりとした植込みになったこと、豊島ヶ岡御陵地、護国寺などの森の近くにあることなどで子どもたちの引きあげた静かな遊園には、四季折々の小鳥、大鳥類が飛来して様々の姿をみせてくれる。からす、つばめ、はと、すずめ、の類はもとより、こじゆ鶏、やまとり、もづ、せきれい、など居残つてお迎えをまつ数人の子どもたちとあかず眺める風景である。

相当の経費によつて、鳥小屋の修理も終つた。扉をあけて、餌をまいておけばこの自然の訪客のいずれかが宿をとることかとも期待した。雀くらいはと当てにもしたが、一向に入ってくれる様子もない。このことを小鳥の飼育にあかるい知人に話したところ雀こそ最も飼育のむずかしい鳥であることを聞かされて、がっかりした。そしておいしいことではあるが当分庭の大きな鳥小屋の空家そのままとして、保育室での小さい鳥籠の飼育でがまんしなければならぬ。今状態である。

子どもの親しみやすい、動植物を身近かに備えることには、様々な困難がともなうので、どちらの幼稚園でもその企画通りにはならないことが多い。つとめて、動物園、植物園、公園、園芸場、飼育場、小鳥屋さんなどこ

種の適宜の場所を見つけて、園外保育のかたちによってこののぞみを満すようにでもしたい。大きい望みは果されないにしても、決してこの望みを失ってはならない。

この頃簡易になされている、窓園芸、保育室の窓に、植木鉢、硝子瓶、あきかん、みかん箱の類、この草花、蔬菜の栽培、金魚や、おたまじやくしの飼育などによっても、子どもたちにこのふんいきになじませることが出来ることであろうし、又保育室を二つ三つ以上も幼稚園では、その取扱いの方法によっては、質的にも、量的にも、より効果的にすることも考えられる。各組の話し合いの上で、異つた材料を用意して、お互に見せ合ったり、交換したりすることなどによって、狭きものも広く役立たせることも可能になる。

子どもの自然のものに対する関心は、それに接触する、少い時間、少い回数では育つものではない。毎日毎日いつくしむことによって、それを知り、知ることによってそれをいつくしむというのでなければよく育たない。急に眼前に美しい花があらわれても、その美しさを知っても、その花を愛撫する念は弱い。他人の丹精した公園の花、垣根近くにさく花のたやすく手折れているのを見ても、この愛撫の気持を育成こそ最も大きなねらいであろうと思われる。

幼稚園期の子どもの「自然」への指導の目標をどこにおくかを考える時、花の名を知り、花瓣の数を数えることは、こどもの知的理解の要求の進むに従つて、与えるもので、どこまでも、子どもらしく、自然のものに対する愛情を育成することがその大きなねらいである。

しかも、この育成は幼稚園の子どもの経験内容のいずれよりもはるかに、地味なものであり、又時間的にも、相当ながい眼で誘導しなければならぬ性質のものである。

大きな幼稚園教育指導の大切な芽が小さい、いろいろの雑草によつて妨げられてはいないではなからうか。